



Title	編輯を終へて
Author(s)	
Citation	懷徳. 1938, 16, p. 57-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89016
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

下車、借切バスを驅りて竹藪の續く川縁の道を一筋に走ること三里にして太山寺に到着し待つこと暫しにて中村直勝先生を迎へ國寶の繪畫・古文書・建築を懇切な中村先生の御指導を承りつゝ拜觀し歸途、西宮戎神社に詣でて社寶を拜觀した。一行三十餘名であつた。

▲六月三十日

午後八時より小講堂に季末茶話會を開く、出席者四十一名。北滿守備より歸郷せし中島曹長の討匪談や、阪倉先生の源氏物語の話があり、成田先生は本日お作りになつた檀原神宮建國奉仕隊の歌を朗唱せられ、平田・仲田・藤塚三君の朗吟があつた。

編輯を終へて

幹事 山本 檜 信

七月七日の夜、蘆溝橋に於ける一發の銃聲に端を發した此の度の事變が、かやうに擴大しようと思像してゐた人は殆どあるまい。一年三ヶ月を経過した今日、我々は地圖を擴げて我が軍隊占領地域の廣大なのに驚嘆する。寡にしてよく大軍を撃滅し一死報國、新しき東亞建設の礎となつた英靈も多數である。茲に謹みて默禱を捧げる。第一線の勇士から来る、どの通信を讀んでも、一兵卒に至るまで聖戰の目的をよく認識してゐることがわかる。抗日頑迷の敵兵は一人残らず殲滅せずんばやまぬ皇軍の將士ではあるが、善良勤勉な隣國の民衆を保護し、幼い

弱い可憐な隣國の少年を愛撫するに、あらゆる力を傾倒して惜まず、共に手を携へて新しき東亞の樂土建設の聖業成就を祈る熱意に燃えてゐないものはない。銃後の我々國民は一致團結、堅忍持久、事變及び事變後の大陸開發に十年からうが百年かゝらうが敢て厭ふところではない。あらゆる困苦缺乏に堪へて我々の精神を以て大陸を經營し、我々子々孫々の爲めに聖戰の目的を貫徹せなければならぬ。

神功皇后や豊臣秀吉による大陸進出が失敗に終つた轍を再び繰返すやうなことがあつては相すまない。

諸先生及び會員諸兄の御援助により本誌も回を重ねること十六、今回も御寄稿の論説、いづれも修養の糧たちざるものはない。秋月先生の

論は支那近代哲學の根底を闡明せられ、荒木先生は今夏南京に於て不幸長逝せられし新城博士の業績に就て、涙を揮つて縷々詳述せられ、また高橋先生の一文は、盟邦獨逸興隆の基となりたる青年運動に就て説述せられたものである、其の他諸先生及び會員の手になる詩文、共に御熟讀を希望する。

附録とせる息抱齋詩稿は五月逝去せられた岡山先生の遺稿を吉田先生が編輯せられたものであつて、平素其の御高德を敬慕せざるものなかりし故先生の此の世に遺された唯一の著作である。好箇の記念として諸君の愛誦をのぞむ。

最近、本堂にて開催された支那語講習會には七十名の有爲の青年が出席して、熱心に聴講するのを見受けた。我が青年層に新しき機運が滂

沛として起りつゝあるは、誠にたのもしき限りである。今日は議論の時代ではない、實踐の時代である。青年よ、大陸に雄飛せよ。我が帝國の大陸經營をして大成せしめよ。喜んで大陸にその骨を埋めよ。かくてこそ我が大和民族の將來は宏遠であり　皇運は天壤無窮である。